

第三の新人と作品

小市民

日常性

はじめに

第三の新人は、野間宏・武田泰淳など「第一次戦後派」、大岡昇平・三島由紀夫など「第二次戦後派」に続く作家の呼称として、評論家が使用しました。まず、山本健吉が『第三の新人』（昭和28年(1953)「文学界」）で名称を使いました。その後、服部達は『劣等生・小不具者・そして市民』（昭和30年(1955)9月「文学界」）で、安岡章太郎・吉行淳之介・小島信夫・庄野潤三・小沼丹・曾野綾子・三浦朱門の7人の作家を概括しました。この7人に遠藤周作と阿川弘之を加えた9人が「第三の新人」と認識されてきました。戦後派の文学が政治や戦争を主題として追求したのに比べ、第三の新人は日常性の細部や実感を重んじました。その後、個々の作家が代表作を発表すると、かつて第三の新人と呼ばれた作家の総称になりました。

[資料リスト](#)

安岡章太郎

生涯 大正9年(1920)5月30日～平成25年(2013)1月26日。高知市に生まれました。父は陸軍の獣医で父の勤務地の関係で各地を転々とし、学業に嫌気がさしたと言います。東京市立一中を卒業し、三浪して慶応大学に入学しました。大学を落第し、のち招集を受け北満州に赴きました。現地で結核を患い、入院しているうちに所属部隊はフィリピンで全滅しました。

戦後、一家は困窮し、カリエスを患いながら病床で小説を書きました。昭和26年(1951)に『ガラスの靴』が芥川賞の候補になりました。

作風・特徴 社会に適応することが下手な、劣等者の位置に自分を置いています。政治的なものには左右に関わらずシニカルで、作品では食欲や下痢や糞尿の話がしばしば大きな役割を果たしています。

受賞歴

『ハウスガード』で昭和28年に時事文学賞を受賞。

『陰気な愉しみ』『悪い仲間』の2作で、昭和28年に芥川賞(第29回)を受賞。

『海辺の光景』で昭和35年に芸術選奨(第10回)と、野間文芸賞(第13回)を受賞。

『幕が下りてから』で昭和42年に毎日出版文化賞(第21回)を受賞。

『走れトマホーク』で昭和48年に読売文学賞(第25回)を受賞。

昭和51年に日本芸術院賞を受賞。

『流離譚』: 昭和57年に日本文学大賞(第14回)を受賞。

『僕の昭和史』で昭和63年に野間文芸賞(第41回)を受賞。

平成3年に朝日賞を受賞。

「伯父の墓地」で平成3年に川端康成文学賞(第18回)を受賞。

『果てもない道中記』で平成7年に読売文学賞随筆・紀行賞（第47回）を受賞。

『鏡川』で平成12年に大佛次郎賞（第27回）を受賞。

平成13年に文化功労者に選ばれる。

吉行淳之介

生涯 大正13年(1924)4月13日～平成6年(1994)7月26日。岡山市に生まれました。父は作家の吉行エイスケです。麻布中学校、静岡高校に進み、昭和20年東京大学英文科へ入学しますが、間もなく敗戦を迎えました。戦後は女学校の講師、雑誌社の手伝いなどを勤め、大学を中退し正式の編集記者として働くかたわら創作活動を行いました。処女作の『薔薇販売人』（昭和25年(1950)）、『原色の街』（昭和26年(1951)）などの初期作品があります。

作風・特徴 戦後の左翼的進歩的な言説がはびこる中、それらは戦中の軍国主義的な狂騒と本質は変わらないと感じ、作品では一貫して狭い閉ざされた場での人間心理の葛藤を、凝縮したイメージを通して提示しました。

受賞歴

『驟雨』で昭和29年に芥川賞（第31回）を受賞。

『不意の出来事』で昭和40年に新潮社文学賞（第12回）を受賞。

『星と月は天の穴』で昭和42年に第17回芸術選奨を受賞。

『暗室』で昭和45年に谷崎潤一郎賞（第6回）を受賞。

『鞆の中身』で昭和50年に読売文学賞（第27回）を受賞。

『夕暮まで』で昭和53年に野間文芸賞（第31回）を受賞。

昭和54年に日本芸術院賞を受賞。

『人工水晶体』で昭和61年に講談社エッセイ賞（第2回）を受賞。

小島信夫

生涯 大正4年(1915)2月28日～平成18年(2006)10月26日。岐阜市に生まれました。旧制岐阜中学校卒業後、3年間ぶらぶらして20歳で第一高等学校に入学しました。昭和12年(1937)に処女作『裸木』を発表し、昭和13年(1938)東京大学英文科に入学します。在学中に『往還』『公園』などを発表しました。昭和17年(1942)招集され中国北部で従軍。昭和21年(1946)復員。千葉県立佐原女学校、都立小石川高校、明治大学工学部などで教鞭をとりました。勤務のかたわら旺盛に執筆活動を行い、『吃音学院』『アメリカン・スクール』『城砦の人』『馬』などを発表し、第三の新人として注目されました。

作風・特徴 他の第三の新人とは異なる前衛的作風を持ち、心の屈折が深いといわれます。

受賞歴

『アメリカン・スクール』で昭和29年に芥川賞（第32回）を受賞。

『抱擁家族』で昭和40年に谷崎潤一郎賞（第1回）を受賞。

『私の作家評伝』で昭和48年に第23回芸術選奨を受賞。

『私の作家遍歴』で昭和56年に日本文学大賞（第13回）を受賞。

昭和57年に日本芸術院賞を受賞。

『別れる理由』で昭和 57 年に野間文芸賞（第 35 回）を受賞。

『うるわしき日々』で平成 9 年に読売文学賞（第 49 回）を受賞。

庄野潤三

生涯 大正 10 年(1921)2 月 9 日～平成 21 年(2009)9 月 21 日。大阪府住吉村（現大阪市）に生まれました。大阪外語学校英語部卒業後、昭和 18 年(1943)12 月九州大学東洋史学科を学徒出陣で仮卒業し、海軍に入隊しました。戦後は今宮中学校・南高校で教職に就き、のち朝日放送に勤務し、勤務のかたわら小説を書き始め、昭和 24 年(1949)に『愛撫』を、翌年には『舞踏』を発表しました。

作風・特徴：なにげない日常生活の細部、家庭でのふとした会話場面のとらえ方は、現代作家の中でも屈指の巧さを誇ると言われます。

受賞歴

『プールサイド小景』で昭和 29 年に芥川賞（第 32 回）を受賞。

『静物』で昭和 35 年に新潮社文学賞（第 7 回）を受賞。

『夕べの雲』で昭和 40 年に読売文学賞（第 17 回）を受賞。

『紺野機業場』で昭和 45 年に第 20 回芸術選奨を受賞。

『絵合せ』で昭和 46 年に野間文芸賞（第 24 回）を受賞。

『明夫と良二』で昭和 47 年に毎日出版文化賞（第 26 回）と、赤い鳥文学賞（第 2 回）を受賞。

昭和 48 年に日本芸術院賞を受賞。

小沼丹 (おぬま たん)

生涯 大正 7 年(1918)9 月 9 日～平成 8 年(1996)11 月 8 日。東京生まれ、昭和 17 年(1942)早稲田大学英文科を卒業しました。習作時代は井伏鱒二に師事します。戦後は早稲田大学理工学部講師、助教授を経て、昭和 33 年(1958)から文学部教授を務めました。昭和 29 年(1954)『村のエトランジェ』が評価され、翌年『白孔雀のゐるホテル』で芥川賞候補になりました。

作風・特徴：さりげない日常を見据える視点が印象的と言われます。

受賞歴

『懐中時計』で昭和 44 年に読売文学賞（第 21 回）を受賞。

『椋鳥日記』で昭和 50 年に平林たい子賞（第 3 回）を受賞。

曾野綾子

生涯 昭和 6 年(1931)9 月 17 日、現在の葛飾区立石に生まれました。4 歳の時、田園調布に移り、のち聖心女子大学英文科を卒業しました。中学生の頃から作家を志し、『裾野』（昭和 26 年:1951）を書いて臼井吉見に認められます。昭和 28 年(1953)大学卒業前に三浦朱門と結婚し、昭和 29 年(1954)に『遠来の客たち』が芥川賞の候補になり、これが出世作になりました。

作風・特徴：知的に明るく軽妙な文体で、ストーリーの仕立て方が上手い作家です。解放された女性らしい澀刺さをもって、「才女時代」（臼井吉見評）と呼ばれる一時代を画しました。ま

た、自己の体験や認識に知的な解釈をほどこして話の核とし、自然で気の利いた多くの短編小説を執筆しました。

受賞歴

昭和 54 年にパチカン有功十字勲章を受章。

昭和 55 年(1980)に『神の汚れた手』で第 19 回女流文学賞に選ばれましたが辞退しています。

昭和 63 年に第 4 回正論大賞を受賞。

平成 5 年に日本芸術院賞恩賜賞を受賞。

平成 6 年に第 46 回日本放送協会放送文化賞を受賞。

平成 9 年に第 31 回吉川英治文化賞を受賞。

平成 9 年に読売国際協力賞（海外邦人宣教者活動援助後援会（jomas）曾野綾子代表）を受賞。

平成 15 年に文化功労者に選ばれる。

平成 24 年に第 60 回菊池寛賞を受賞

三 浦 朱 門

生 涯 大正 15 年(1926)1 月 12 日～平成 29 年(2017)2 月 3 日。東京に生まれました。高知高校で阪田寛夫の影響を受けて文学へ進みます。東京大学文学部言語学科を卒業し、昭和 25 年(1950)同人雑誌「新思潮」を発刊しました。昭和 27 年(1952)『斧と馬丁』が芥川賞候補になりました。昭和 60 年(1985)から約 1 年半、文化庁の長官を務めます。平成 8 年(1996)から 2 年間教育課程審議会会長を務め、「ゆとり教育」を方向付けました。また、平成 16 年(2004)～平成 26 年(2014)まで日本芸術院院長を務めました。

作風・特徴：昭和 30 年の『冥府山水図』、昭和 32 年の『珊瑚』などの作品は、「中島敦の系統」（武田泰淳評）と言われ、芥川龍之介の初期を思わせる歴史的・知的小説でした。昭和 34 年の『セルロイドの塔』あたりから人間関係の洞察とリアリティが強くなります。その後も地味ながら着実に社会や人間を観察する小説を数多く発表しました。

受賞歴

『箱庭』で昭和 42 年に第 14 回新潮社文学賞を受賞。

昭和 45 年にパチカン聖シルベストロ勲章を受章。

『武蔵野インディアン』で昭和 58 年に第 33 回芸術選奨を受賞。

昭和 62 年に日本芸術院賞恩賜賞を受賞。

平成 10 年に第 14 回正論大賞を受賞。

平成 11 年に文化功労者に選ばれる。

遠 藤 周 作

生 涯 大正 12 年(1923)3 月 27 日～平成 8 年(1996)9 月 29 日。東京の巣鴨に生まれました。父は安田銀行に勤め、母は上野音楽学校のバイオリン科の学生でした。大正 15 年(1926)父の転勤で満州の大連に移り、満州時代に両親が離婚しています。昭和 8 年(1933)日本に戻り、神戸市に居住します。翌年洗礼を受けました。三浪して慶応大学文学部予科に入学。しかし、父が

指示した医学部ではないため叱責され、家を飛び出してアルバイトをしながら学校に行きました。昭和 20 年(1945)仏文科へ進学。昭和 22 年(1947)にエッセイ『神々と神と』が注目されました。また、同時に『カトリック作家の問題』を「三田文学」に発表。同誌の同人になり、以降同誌に評論を書きます。昭和 25 年(1950)～昭和 28 年(1953)の約 2 年半フランスに留学し、フランス現代カトリック文学をリヨン大学で学びました。昭和 29 年(1954)慶応の先輩である安岡章太郎を通じて、吉行淳之介・庄野潤三・三浦朱門などと知り合います。同年初めての小説『アデンまで』を「三田文学」に発表しました。

作風・特徴 作品に一貫するのは、キリスト教の信仰を大きな柱とするヨーロッパと、日本の精神的風土との異質性の追求です。作品では、日本の精神的風土にキリスト教が定着するかどうかという問いかけをしています。『海と毒薬』『沈黙』の 2 作は、その問題に正面から取り組んだ重要な作品です。

受賞歴

『白い人』で昭和 30 年に第 33 回芥川賞を受賞。

『海と毒薬』で昭和 33 年に第 5 回新潮社文学賞と、第 12 回毎日出版文化賞を受賞。

『沈黙』で昭和 41 年に第 2 回谷崎潤一郎賞を受賞。

『キリストの誕生』で昭和 53 年に第 30 回読売文学賞（評論伝記賞）を受賞。

昭和 54 年に日本芸術院賞を受賞。

『侍』で昭和 55 年に第 33 回野間文芸賞を受賞。

『深い河』で平成 5 年に第 35 回毎日芸術賞を受賞。

平成 7 年に文化勲章を受章。

阿川弘之

生涯 大正 9 年(1920)12 月 24 日～平成 27 年(2015)8 月 3 日。広島市に生まれました。昭和 12 年(1937)に旧制広島高等学校入学。昭和 15 年(1940)に東京大学文学部国文科へ入学。同 17 年(1942)9 月繰り上げて卒業し海軍に入隊しました。同 19 年(1944)から中国漢口で通信情報作業に従事し、昭和 21 年(1946)3 月に復員しました。郷里広島に戻り原爆で死んだと諦めていた父母に再会しました。その後、上京して谷川徹三・志賀直哉らを訪ね、のち文筆生活に専念しました。昭和 21 年 9 月「世界」に『年年歳歳』『霊三題』を発表し、戦後初の新人作家として第一歩を記しました。しかし、戦後派作家の作風に押されて忘れられ、しばらく不遇の時期を過ごしました。昭和 27 年(1952)に『春の城』が読売文学賞に選ばれ再認識されています。

作風・特徴 志賀直哉の作品に大きな薫陶を受けています。主要な作品は戦記文学・伝記文学です。

受賞歴

『春の城』で昭和 27 年に第 4 回読売文学賞を受賞。

『なかよし特急』で昭和 35 年に第 7 回産経児童出版文化賞を受賞。

『山本五十六』で昭和 41 年に第 13 回新潮社文学賞を受賞。

昭和 54 年に日本芸術院賞恩賜賞を受賞。

『井上成美』で昭和 62 年に第 19 回日本文学大賞を受賞。

『志賀直哉』で平成 6 年に第 47 回野間文芸賞と、第 48 回毎日出版文化賞を受賞。

平成 5 年に文化功労者に選ばれる。

平成 11 年に文化勲章を受章。

『食味風々録』で平成 13 年に第 53 回読売文学賞（随筆・紀行賞）を受賞。

平成 19 年に第 55 回菊池寛賞を受賞。

【参考文献】

『増補改訂 新潮日本文学辞典』 新潮社辞典編集部編 新潮社 昭和 63 年 1 月

